

# 西行の歌を現代に生かすには

どうしたらよいか

木 寺 俊 爾

## 一、はじめに

現代では、古典は、現実社会とは迂遠な関係にあり、役立たないものとして軽視されている。山本健吉氏も言っているように、古典とは、元来普遍性と包括性を持って、後世の人々にその規範を示しながら語りかけて来たものである。それ故古典は、人生における根本態度を教示するものであると言える。

その古典が嫌われるということは、一体どういうことなのだろうか。それはひとえに古典への接し方にあると言える。従来の訓詁注積的な古典学習は、古典を無味乾燥にする大きな要因である。古典における訓詁注釈は、あくまでも学習上の基礎であって、その上に立っての展開が必要である。

ここでは、文学性や芸術性の究明は勿論のこと、人生観・世界観についての共鳴や批判がなされなければならない。

こうした反省と新たな意欲から、こゝに古典を現代に生かす一例を、実践を通して報告したい。なお、この研究にあたって本校の先生方の全面的な協力をえた。

## 二、主題

西行の歌を現代に生かすにはどうしたらよいか。

## 三、対象学年

第二学年

## 四、教材

好学社「古典乙Ⅰ古文編」の「あまのかぐ山」その他補充歌

## 五、研究目標

教科書の新古今集をもとに、新古今集、あるいは新古今時代という流れの中で西行を捉え、西行と語り合うことによって、西行のものの見方、考え方、生き方を理解させることにより、自らの人生を考えさせることを目標とする。

## 六、研究の進め方

研究は次の順序で進めた。

①教科書における教材の取り扱われ方

- ② 生徒の実態調査
- ③ 指導計画の立案
- ④ 指導案の作成
- ⑤ 研究授業
- ⑥ 研究授業についての評価と反省
- ⑦ まとめ

## 七、実践

① 各種教科書における新古今集の採録状況（資料一）  
十二社の乙Ⅰ、乙Ⅱの教科書について調査した。教科書中の新古今集の歌の頻出度を調べ、各教科書の特色と教材としての妥当性を検討しようとした。

西行の歌について言えば、おおむね妥当だと思われるが、西行の独自性という面から見ると、より内面的な作品を採り上げる必要がある。西行の歌の特色は雑歌にあると考えられるが、現教科書では軽視されている。有名歌もさることながら、この点についても再度検討の余地がある。本研究では、プリントでこれらの歌を補うことにした。

尚、乙Ⅰで扱うか、乙Ⅱで扱うかは問題であるが、西行の歌は、乙Ⅱで扱う方が適當のようである。

### ② 生徒の実態調査（資料二）

指導計画の立案に当り、生徒の受け入れ能力を把握する必要がある。調査はテスト形式とし、問題を次の二部に分けた。

#### 第一部 古文に対する基礎能力テスト

#### 第二部 新古今集及び西行について

結果を見ると、B・C・I・Jの力が不足していることが分つ

た。

### ③ 指導計画の立案（資料三）

新古今集の指導に五時間をあて、研究授業を四時間目に置いた。立案にあたり次の点に留意した。

(1) 平安末期から鎌倉にかけての時代背景を周知させる。（不安の時代として、）

(2) 当時の無常思想・末法思想・浄土思想について理解させる。

(3) 西行の歌の特質を理解させ、歌から西行の心を捉え、日本人の心を考えさせる。

(4) 訓詁注釈は家庭学習を徹底させ、教室では大事なことだけを説明して、第一段階で足踏みしないようにする。

(5) 新古今集の歌を「定家的なもの」と「西行的なもの」に大別して、「定家的なもの」を第三時間目までにまとめる。

(6) 研究対象である西行の歌は第四時間目に置き、予習を徹底させる。

(7) 授業計画は予め生徒に周知させる。

(8) この授業は教師中心で行なうが、発問を通して生徒に考える場を与える。

### ④ 本時の指導案（資料四）

補助プリント（資料五～八）

(1) 補充歌

(2) 西行について、西行の歌について

(3) 新古今集の時代背景、思想について

(4) 新古今集について

(5) 研究授業についての評価と反省

(6) 評価は、第四時間目に宿題として出した感想文によった。その内

数人のものを別紙に掲げた。(資料九)

全体として、所期の目的が達成されたように思う。

他のものと同じように、平常点として、五点法で採点した。

(四)反省

(a)時間について

新古今集を五時間であげ、その中で西行に一時間を充当するといふ時間配分は、古典の年間授業計画からすると妥当だと考える。だが実際の授業で痛切に感じたことは、時間不足であった。訓詁注釈をこえて、西行という人とその生き方に迫ろうと思えば、よほど時間的余裕がなければならぬ。故に、人と作品に迫る上での授業の役割は、生徒の内面に点火して、燃焼することを期待することであろう。

(b)生徒の実態(能力と意欲)について

生徒の能力は中程度と思われるが学習意欲の点で不満であった。調査結果からもわかるように、古語や文法の力が不足しており、授業の流れが停滞することもあった。この点については、第一学年での学習を徹底しなければならない。

(c)家庭学習について

国語における家庭学習は、他教科に比べればまことに不十分である。

一面から言えば、古典は、生徒にとって、外国語と同じである。英語にかける半分でもと願うのは私だけであろうか。家庭学習の充実は、教師の地味な努力の中から生徒に要求すべきものである。

この観点から、本年は、常にノート点検を厳しくし、宿題や予習

の不十分なものには、反復指導または減点という方法で引き締めて来た。本時の指導においてもある程度効果があったものと思われる。

(d)授業展開について

「考えさせる授業」とは、生徒に考える場を与えることである。場は生徒の生活の中にあるのであって、教室の中だけとは限らない。

本時の指導でグループ学習のような形態をとらなかつたのは、時間的制約と共に、私の場合、生徒をゆすぶる授業をするためには、発問による教師中心の授業の方が効果的だと考えたからである。西行を五十分で理解させるということは、それ自身無理なことなのだが、生徒に考えを深めさせる点で充分ではなかつた。ただ、補助プリントは第三時間目に渡してあり、生徒によっては本時の動機づけができていないはずである。事実感想文を読んで見ると、教室で点火され、自己の内面で燃焼させた者が相当いたこともわかる。

(e)指導者について

「考えさせる授業」という点では、指導者の能力が問題となる。専門的な知識と指導力はもとより、高い見識と豊かな生活経験が要求される。この点では、まことに不十分であった。ただこの西行については、些か関心もあり、身近な存在なので、私自身相当燃えていたことは確かである。

⑥まとめ

西行の歌を現代に生かす試みは、一応所期の目的を達成したものと考えられる。一人の偉大な人間を見詰めてゆけば、そこから得るものは大きい。私はこの大胆な試みを実行するにあたり、自己を通してできるだけ客観的に生徒の前にその人物を浮き彫りにし、自由な批判と適切な示唆により、生徒に考える糸口を与えようと努めた。西行の生き方が、生徒一人一人に共鳴と反発を与えながらも、「生きる」ということについて考えさせることができたと思う。大事なのは、これに触発されて自己と自己の人生を深く考えさせるところまで発展させることであるが、そうした態度の確立はせっかちに求めるべきものではない。

古典を現代に生かすということは、とりも直さず古典の中に我々が生きることなのだろう。

#### 八、おわりに

この研究は、主題が大きいので、ともすると刀折れ矢尽きることもありましたが、逃げることのできない相手なので、一丸となって肉迫いたしました。

同志の御批判を得て、今後の古典教育に新しい方向を見つけていくことができると願っています。

資料一古典乙(1・2) 教科書における新古今和歌集の採用状況

西行法師の部

新古今		山家集	和	歌	乙	乙	計
六・冬	上・冬	寂しさに耐へたる人のまたもあれな庵並べむ冬の山里			7	5	12
四・秋・上	上・秋	心なき身にもあはれは知られけりしぎ立つ沢の秋の夕暮れ			9	1	10
三・夏		道のべに清水流るる柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ			6	4	10
十・躰旅		年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山			3	5	8
十七・雑・中	中・雑	よしの山やがていでじとおもふ身を花ちりなばと人やまつらむ			3	2	5
五・秋・下		きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか声の遠ざかりゆく			2	2	4
一・春・上		吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ			0	4	4
六・冬		津の国のなにはの春は夢なれや葦の枯れ葉に風渡るなり			1	2	3
四・秋・上		あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風たちぬみやぎ野の原			0	1	1
一七・雑・中	中・雑	古畑のそばの立木にゐるはとの友よぶ声のすぎき夕暮			0	1	1
六・冬		あきしのや外山の里やしぐるらむ生駒のたけに雲のかかれる			0	1	1
十四・恋・四		うとくなる人を何とて恨むらむ知られず知らぬをりもありしに			0	1	1
三・夏		よられつる野もせの草のかぎろひて涼しくもる夕立の空			1	0	1
十八・雑・下	上・春	願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎのもち月の比 <small>こら</small>			1	0	1
十二・恋・二		はるかななる岩のはざまにひとりゐて人のおもはで物思はばや			1	0	1
	中・雑	ませに咲く花にむつれてとぶてふのうらやましくもはかなかりけり			1	0	1

その他の歌人の部

作者

和

歌

式子内親王

山深み春とも知らぬ松の戸に絶えだえかかる雪の玉水

玉の緒よたえなばたえね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

桐の葉も踏みわけがたくなりにけり必ず人を待つとなけれど

帰り来ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふたちばな

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る

忘れては打歎かるる夕かな我のみしりて過ぐる月日を

窓近き竹の葉すさぶ風の音にいと短かきうたたねの夢

さりともと待ちし月日ぞうつりゆく心の花の色にまかせて

たそがれの軒ばの萩にともすればほにいでぬ秋ぞ下にこととふ

やへにほふ軒ばの桜うつろひぬかせよりさきにとふ人もがな

さむしろの夜はの衣手さえさえて初雪白し岡のべの松

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

見渡せば花もみちもなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし

たまゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風

大空は梅のにほひにかすみつつ曇りも果てぬ春の夜の月

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空

乙 1

乙 2

計

13

2

15

1

2

3

0

3

3

1

4

5

5

6

11

9

2

11

1

0

1

1

0

1

0

1

1

1

1

1

0

1

1

1

1

2

2

0

2

0

2

2

0

2

2

0

2

2

2

2

4

3

4

7

9

4

13

## 藤原家隆

霜まよふ空にしをれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞふる

梅の花匂ひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ

帰るさのものや人のながむらむ待つ夜ながらのありあけの月

明けばまた越ゆべき山のみねなれや空行く月の末のしら雲

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りていづる有明けの月

下もみぢかつ散る山の夕しぐれぬれてやひとり鹿の鳴くらむ

にはの海や月の光のうつろへば浪の花にも秋はみえけり

ながめつつ思ふもさびし久方の月の都のあけがたの空

梅が香に昔をとなれば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる

思ひいる身は深草の秋の露たのめし末やこがらしの風

思ひいでよたがかねごと末ならむきのふの雲のあとの山風

かすみ立つ末の松山ほのぼのと浪にはなるるよこ雲の空

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほととぎす

またや見むかたののみ野の桜狩り花の雪散る春のあけぼの

思ひあまりそなたの空をながむればかすみをわけて春雨ぞ降る

誰かまた花櫛に思ひいでむわれも昔の人となりなば

駒とめてなほ水かはむやまぶきの花の露そふるでの玉川

小笹原風待つ露の消えやらすこのひとふしを思ひ置くかな  
うき身をば我だにいとふいとへただそをだに同じ心と思はん

## 藤原俊成

0

2

2

1

1

2

1

0

1

5

1

6

4

1

5

4

1

5

2

2

4

1

1

2

0

1

1

0

1

1

0

1

1

3

9

12

8

1

9

2

2

4

0

2

2

0

2

2

0

1

1

0

1

1

## 藤原良経

雨そそぐ花橘に風過ぎて山ほととぎす雲に鳴くなり

人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにしのちはただ秋の風

み吉野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春はきにけり

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかかぬむ

空はなはかすみもやらず風さへて雪げにくもる春の夜の月

ふるさとのもとあらの小萩咲きしよりよなよな庭の月ぞ映れる

ふるさとはあさちが末になりはてて月にのこれる人のおもかげ

いさり火の昔の光ほの见えてあしやの里に飛ぶ螢かな

ささの葉はみ山もさやに打そよぎ氷れる霜を吹く嵐かな

見渡せば山もとかすむみなせ川夕べは秋と何思ひけむ

ほのぼのと春こそ空にきけらし天の香具山かすみたなびく

み吉野の高嶺の桜散りにけり嵐も白き春のあけぼの

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山

思ひいづる折りたく柴の夕けぶりむせぶもうれしわすれがたみに

おく山のおどろが下もふみわけて道あるよぞと人に知らせん

寂しさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしおる榎のした露

暮れてゆく春のみなとは知らねどもかすみに落つる宇治の柴舟

寂しさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮れ

むらさめの露もまだひぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕ぐれ

## 後鳥羽院

## 寂蓮法師

2	8	5	1	0	0	2	4	5	8	0	0	0	0	1	0	3	5	1
1	2	5	0	1	2	3	2	2	2	1	1	1	1	1	2	2	4	0
3	10	10	1	1	2	5	6	7	10	1	1	1	1	2	2	5	9	1



源 俊 頼	宮 内 卿	曾 禰 好 忠	藤 原 雅 経	俊 成 女	前 大 僧 正 慈 円
古郷は散る紅葉葉にうづもれて軒の忍ぶに秋風ぞ吹く	とをちには夕立涼し久堅の天の香具山雲がくれゆく	花さそふ比良の山風吹きにけりこぎゆく舟の跡見ゆるまで	薄く濃き野べの緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え	花散りし庭の木の葉も茂りあひて天照る月のかげぞまれなる	ゆらの門を渡るふな人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かも
1	0	2	3	0	0
0	1	4	5	1	1
1	1	6	8	1	1
影とめし露のやどりを思ひいでて霜にあとふ浅茅生の月	花散りし庭の木の葉も茂りあひて天照る月のかげぞまれなる	ゆらの門を渡るふな人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かも	薄く濃き野べの緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え	花散りし庭の木の葉も茂りあひて天照る月のかげぞまれなる	ゆらの門を渡るふな人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かも
1	2	2	2	2	2
2	4	4	4	1	1
4	6	3	3	4	3
おもかげのかすめる月ぞ宿りける春や昔の袖の涙に	たちばなのほふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする	み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり	移りゆく雲に風の声すなり散るかまさきのかづらきの山	影とめし露のやどりを思ひいでて霜にあとふ浅茅生の月	ゆらの門を渡るふな人かぢをたえゆくへも知らぬ恋の道かも
0	6	0	6	0	0
4	4	3	4	1	1
4	9	1	1	1	1
風通ふ寢覚の袖の花の香にかおる枕の春の夜の夢	わが恋は庭のむらはぎうらがれて人をも身をも秋の夕ぐれ	大江山かたぶく月の影さえてとばだの面に落つるかりがね	秋深きあはじの鳥の有り明けにかたぶく月を送る浦風	庭の雪にわが跡つけて出でつるをとはれにけりと人や見るらむ	五月やみ短かき夜半のうたたねに花たちばなの袖に涼しき
6	0	0	0	0	0
0	1	1	1	1	2
1	1	1	1	1	2
うらみわびまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空	鶺鴒かひ舟高瀬さし越すほどなれや結ばほれゆくかがり火の影	うらみわびまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空	鶺鴒かひ舟高瀬さし越すほどなれや結ばほれゆくかがり火の影	うらみわびまたじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空	鶺鴒かひ舟高瀬さし越すほどなれや結ばほれゆくかがり火の影
1	0	1	0	1	0
0	1	0	1	0	1
1	1	1	1	1	1

藤原秀能	夕月夜しほ満ちくらし難波江のあしの若葉に越ゆるしら波	10	3	13
藤原有家	風渡る浅茅が末の露にだにやどりもはてぬ宵の稲妻	1	0	1
藤原清輔	ながらへばまたこのごろやしのばれん髪しとみし世ぞ今は恋しき	0	1	1
藤原忠良	夕づく日さすや庵の柴のとにさびしくもあるかひぐらしの声	0	1	1
藤原頭輔	秋風にたなびく雲の絶えまよりめれいづる月の影のさやけさ	1	1	2
藤原実定	なごの海のかすみのまよりながむれば入る日をあらふ沖つ白波	3	4	7
藤原兼輔	みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらむ	0	1	1
鴨長明	ながむればちぢにも思ふ月にまたわが身ひとつの峰の松風	0	1	1
伝教大師	阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ袖に冥加あらせたまへ	1	0	1
持統天皇	春過ぎて夏来にけらししろたへの衣ほすてふ天のかぐ山	0	1	1
成尋法師母	もろこしもあめが下にぞありと聞くてる月のもとを忘れざらん	0	1	1
紫式部	めぐり会ひてみしやそれともわかぬまに雲隠れにし夜はの月かげ	0	1	1
大江千里	照りもせず曇りも果てぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき	0	2	2
小野小町	あるはななくきは数そふ世の中にあはれいづれの日まで歎かむ	0	1	1
源通光	三島江や霜もまだ干ぬ葦の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く	0	2	2
源通具	深草の里の月影さびしくもすみこしままの野べの秋風	1	0	1
能因法師	山里の春の夕暮れきてみれば入相の鐘に花ぞ散りける	0	1	1
高階貴子	忘れじの行末まではかたければけふを限りの命ともがな	0	1	1
源頼政	庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな	1	0	1

藤原資宗	いかだしよ待てこと問はむみなかみはいかばかりふく山の嵐ぞ	0	1	1
二条院讃岐	世にふるは苦しきものをまきのやに安くも過ぐるはつしぐれかな	0	1	1
よみ人知らず	夕暮れに命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし	0	1	1

資料二、I新古今集指導のための予備調査

A 次の(1)(2)(3)の歌は何句で切れているか。

- (1) 山ざくら花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむら消え 1 ( ) 句 ( )  
 (2) 春すぎて夏きたるらし白たへの衣はしたり天の香具山 2 ( ) 句 ( ) 3 ( ) 句  
 (3) いとほしや見るに涙もとどまらず親のなき子の母をたづぬる 4 ( ) 句 ( ) 5 ( ) 句  
 B 次の(4)(5)(6)の歌の傍線部は修辞上何と名づけられているか。

- (4) あしひきの岩間をつたふ**苦水**のかすかにわれはすみわたるかも 6 ( ) ( )  
 (5) さして行く**笠置**の山を出でしより**天**が下には隠れがもなし 7 ( ) ( )  
 (6) 大江山いく野の道の遠ければまだ**ふみ**も見ず**天**の橋立 8 ( ) ( )  
 C 次の(7)(8)の歌はその相互関係からそれぞれどう名づけられているか。

- (7) さつき待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする (古今集) 9 ( ) ( )  
 (8) たちばなのにはふあたりうたたねは夢も昔の袖の香ぞする (新古今集) 10 ( ) ( )  
 D 次の(9)(10)(11)の歌は(1)万葉(2)古今(3)新古今の各集から一首ずつ選び出したものである。( ) 内に歌集名をイ、ロ、ハの符号で記せ。

- また作者は(α)紀貫之、(β)藤原定家、(γ)柿本人麻呂である。( ) 内にその歌の作者を、a b cの符号で記せ。
- (9) 駒とめて袖うち**払ふ**かけもなし佐野のわたりの雪の夕暮れ 11 ( ) ( ) 14 ( )  
 (10) あふみの海夕波千鳥**汝**が鳴けば心もしに古思ほゆ 12 ( ) ( ) 15 ( )  
 (11) 袖ひぢて**掬**ひし 水の水れるを春立つけふの風や解くらむ 13 ( ) ( ) 16 ( )

E 次の各項は(α)万葉集、(β)古今集、(γ)新古今集の歌風を示すことばである。それぞれどの歌集にあてはまるか。a b cの符号を( ) 内

に記せ。

17 観念的 ( ) ( ) 18 現実的 ( ) ( ) 19 象徴的 ( ) ( ) 20 素朴雄健 ( ) ( ) 21 繊細艶麗 ( ) ( )

22 優美典雅 ( ) ( )

F 次の歌人は何集における代表的歌人か。Eと同じ要領で答えよ。

23 在原業平 ( ) ( ) 24 大伴家持 ( ) ( ) 25 後鳥羽上皇 ( ) ( )

G 次の(12)(13)(14)(15)(16)の歌の欠けた所にあとにあげた枕詞のうち適當なものをえらんで書き入れよ。ただし答は各歌の下の ( ) 内に符号を記入してそれを示せ。

記入してそれを示せ。

(12) (26) 光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ ( ) ( ) 26 ( ) ( )

(13) 家であれば筈に盛る飯を(27) 旅にすれば椎の葉に盛る ( ) ( ) 27 ( ) ( )

(14) 寝ても見ゆ寝ども見えけりおほかたは(28) 世ぞ夢にはありける ( ) ( ) 28 ( ) ( )

(15) いとせめて恋しきときは(29) 夜の衣を返してぞ着る ( ) ( ) 29 ( ) ( )

(16) (30) 母がつりたる青がやをすがしと寝ねつたるみたれども ( ) ( ) 30 ( ) ( )

(イ) 千早ぶる (イ) 草枕 (ハ) ももしきの (ニ) たらちねの (ホ) ひさかたの (ヘ) ほのぼのと

(ト) うつせみの (チ) 足引の (リ) むば玉の

H 次の(17)(18)(19)(20)の歌について後の問に答えよ。

(17) しら雪の所もわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ(見れ) ( ) ( ) 31 ( ) ( ) 形

(18) 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやある(らむ) ( ) ( ) 32 ( ) ( ) 形

(19) 山ざくら花の下風ふき(に)けり木のもとごとの雪のむら消え ( ) ( ) 33 ( ) ( ) 形

(20) 春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞ(なく) ( ) ( ) 34 ( ) ( ) 形

(21) 霞たち木の芽もはるの雪(ふれ)ば花なき里も花ぞちりける ( ) ( ) 35 ( ) ( ) 形

問(一) 右五首の歌を(イ)花を現実に見ている歌と、(ロ)雪を現実に見ている歌に分け、各歌の下の ( ) 内に記せ。 ( ) 内に a b の符号を記入せよ。

(二) 同じく右の各歌中の ( ) ( ) でかこんだ語の活用形を下の ( ) ( ) 内に記せ。

I 次の各意味を有する古語を記せ。すでにその一部を記しているから、欠けたところを補え。

41 ハメッタニナイV (ありし) 42 ハタクサンV (ここ) 43 ハカエツテ、ナマジッカV (なか)

44 ハ新シイV (たし) 45 ハソノ上ノマデモ添加ノ意ノ助詞V ( ) ( )

J 次の傍線部について、あとにあげた説明のうち、それにあてはまるものを選び、その符号を（ ）内に記せ。

- 46 秋は来ぬ。 47 秋ぞ来ぬ。 48 秋は去ぬ。 49 人を訪ひぬ。 50 人を訪はねば、知らず。

- 46 ( ) ( ) 47 ( ) ( ) 48 ( ) ( ) 49 ( ) ( ) 50 ( ) ( )

- (イ) 打消の助動詞「ず」の連体形 (ロ) 打消の助動詞の已然形 (ハ) ナ変動詞の活用語尾

- (ニ) 完了の助動詞「ぬ」の命令形 (ホ) 完了の助動詞の終止形 (ヘ) 他に対する希望の助詞

K 左記の文中の [ ] に、後にあげた語群中から適当な語句を選んで記入しなさい。(二度使用可)

新古今集の生れた時代は古代から [51] への過渡期ということがができる。数百年にわたって古代国家の権力をにぎり、社会のしくみもそれにふさわしいように仕上げて来た [52] 階級に対して、平安中期以降急速に力を得てきた新興武士階級は正面からの戦いを開始しはじめた。 [53] の争乱もその根底には二つの階級の葛藤がある。没落して行く者にとつての最後のよりどころは和歌であった。

六条家とか、御子左家というように、家柄で固定し分立した歌の各派は、互に歌を競い合い、技巧をみがいていたが、それは和歌を広く [54] と結びつけていたものから、高度な専門的なもの、いいかえれば高度の [55] に変えさせるものであった。彼等は桐火桶を抱き、衣紋を正して苦吟したのである。それに対して専門歌人とは無縁なところで作歌している人々がいた。それは [56] と呼ばれる人々である。彼等は都の歌界から離れて、自然と [57] に対して、 [58] の中から実感として歌い上げた。

技巧を排して自然率直に表現し、その作歌態度は [59] 的であり、その歌風は [60] の自然風に近いものである。

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60

- (ウ) 万葉 (イ) 直情 (ロ) 人生 (ハ) 隠遁者 (ヘ) 遊び (ト) 生活 (チ) 源平 (リ) 貴族 (ル) 中世

L 左記の文は西行について説明したものである。後の語句から適当なものを選んで [ ] 内に記入せよ。

西行は [61] 時代末期の人で、俗名を佐藤義清といい、鳥羽上皇の北面の武士となり、従五位左兵衛尉に任じられた。十三歳で突然 [62] 通世して、高野、 [63] に隠れ、修業生活をおくった。西行を知る上では彼の歌集である [64] が重要で、 [65] と人生の美を愛し、ことに生活の中から生れる実感をことはを飾らずに歌いあげたところに、 [66] 詩人あるいは [67] 詩人と呼ばれるゆえんがある。

彼は半僧半俗であると言われるが、僧としての仏教的 [68] 感から歌にも一種の [69] と寂とをもっている。また [70] を愛して諸国を行脚し多くの伝説を残している。

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70

M 次の四国 (イ) おもしろさ (ロ) 鎌倉 (ハ) 出家 (ニ) 吉野 (ホ) 自然 (ヘ) 金槐和歌集 (ヘ) 静けさ (ト) 無常  
 (イ) 山家集 (ロ) 平安 (シ) 生活 (ス) 旅  
 M 次のあげた五首の短歌は新古今集のものであり、作者は藤原定家と西行法師である。これを作者別に分けなさい。(解答欄に作者名を記入すること)

- 71 見渡せば花ももみじもなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ
- 72 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ
- 73 さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべん冬の山里
- 74 春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空
- 75 心なき身にもあはれは知られけりしぎ立つ沢の秋の夕暮れ

73	72	71
/	75	74

N 次の短歌を読んで、感じたことを卒直に書きなさい。  
 道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ

資料二、 2 新古今集指導のための予備調査結果集計表

人員	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	点問
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	22	20	13	20	11	14	A
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	1	1	6	22	17	53	B C
100	1	1	0	2	14	6	16	10	5	11	12	11	9	2	0	0	F D E
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	6	16	36	20	19	3	G
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	19	41	22	10	7	1	H 上
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	16	25	19	22	10	8	H 下
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0	0	1	11	35	53	I
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	6	16	21	21	25	11	J
100	/	/	/	/	/	30	22	28	7	9	2	2	0	0	0	0	K
100	/	/	/	/	/	4	20	26	22	13	13	2	0	0	0	0	L
100	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	45	25	19	3	8	0	M

- 〔注〕 ○ 問A～Mの中、同類のものはまとめて集計した。  
 ○ 表中の数字は正答者数である。  
 ○ 調査対象を100人とした。

五		四		三		二		第一時間目	
20分	30分	50分		50分		50分		20分	30分
まとめ	感想文の発表	西行の歌 教科書の二首 プリントから数首 本時間の感想文を四百字詰原稿用紙にまとめて、 次の時間までに提出		定家二首 寂蓮二首 俊成一首 (西行に関するプリント配布)		秀能一首 宮内卿一首 雅経一首 家隆一首 良経一首		後鳥羽院の二首	時代背景、思想、新古今集についてプリントで説明 (プリントは前時間に配布)

資料三 新古今和歌集の授業計画

本時の位置……五時間中の四時間目

目標……西行の歌を通して、「生きる」ということについて考えさせる

時間……五十分

学 習 内 容	学 習 活 動	留 意 点
<p>15 5</p> <p>西行という人物について 「道のべに……」について考える</p> <p>1、歌の直観把握</p> <p>2、西行と旅について 旅の中の孤独について</p> <p>3、素朴な表現について</p> <p>4、西行と自然について</p> <p>(母なる自然……慰め 「ゆくへなく 父なる自然……畏敬 月に……」)</p> <p>「心なき身にも……」について考える</p> <p>1、「心なき身」について</p> <p>2、心と身との分離について 「かへ 孤独の中での自己凝視 れども ……」</p> <p>3、宗教と文学について</p> <p>仏道と歌道の融合と背反 「花にそむ 人と超越者の問題 ……」</p> <p>「さびしさに……」について考える</p> <p>1、「さびしさに堪えた人」とは 「とふ人も思ひたえたる……」</p> <p>2、草庵生活について</p> <p>イ、宗教と文学の融合</p> <p>ロ、庶民性と自然性がある</p> <p>ハ、哀愁、寂寥、孤独に満ちていた</p>	<p>○既習の知識があれば発表させる △プリントで説明する</p> <p>○音読させる ○読んだ時の感じを話させる △予備 調査の一部を紹介する</p> <p>○時と場所の設定により、イメージを描かせる</p> <p>○旅の体験者に旅について話させる(一人に) △西行 の旅の主なものについて説明する</p> <p>○他の歌人の歌と比較して、表現の特色を捉えさせる</p> <p>▽自然の受容について説明する</p> <p>○心とは、身とは、にっ 心〔求道心 いて考えさせる。 風雅心 身〔僧身</p> <p>▽西行の苦悩について説明する</p> <p>▽自己究明の必要性を一般化する (凝視(自己) 融観(他者)</p> <p>▽融合を求めながら背反の中で喘ぐ西行の人間の苦悩を説 明する</p> <p>○超人間的存在を考えさせる</p> <p>仏(神) ↑ 「おそのれ感情」</p> <p>○活発な発言を求める</p> <p>さびしさ 山里のさびしさ孤独のさびしさ、 俗念を去ったさびしさ、 「いかにかすべきわが心」に答え られないさびしさ、</p> <p>▽説明する</p>	<p>中学の教科書にある 若年で出家したことを 中心に当時の社会を現 代化する</p> <p>道場として</p> <p>東洋的自然観 西欧的——征服するも の</p> <p>「も」の意味をしかか り捉えさせる</p> <p>想念の中で 機械文明が精神を荒廃 させ、人間性を喪失し ている現代を認識させ ることにより宗教の必 要性を確認させる</p> <p>句切れ(三、四)に注意 「さびしさ」こそ西行 を一生つき動かしたも の</p>



二、祈りの生活

3 草庵生活の必要性

イ、人の心を純化する

ロ、自己の人間形成と救いのため

に

4 草庵生活の現代化

自己凝視の場をどこに求めるか

5 草庵生活も旅も共に孤独の場であり、自己究明がそこにおいてなされた。

○生徒各自の生活の中で考えさせる  
場を積極的につくり出す  
旅、散歩、個室、病床、……  
▽常住真実なものを求める心——孤独な場——祈る——  
救い

祈りの生活

人間存在

人間孤独の思想

孤独の中からわき出す

想念

資料五

補充歌

月の歌あまたよみけるに

一、ゆくへなく月に心の澄みすみてははいかにならむとす

らむ

花の歌あまたよみけるに

二、よしの山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりに

き

風わずらひて山寺に……

三、かへれども人のなざけにしたはれて心は身にもそはずなり

ぬる

五首述懐

四、うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとともいかに

かはせん

心におもひける事を

五、いかでわれきよくもらぬ身になりて心の月のかげをみが

かん

花の歌あまたよみけるに

六、はなにそむころのいかでのこりけむ捨てはててきと思ふ

我身に

冬歌よみけるに

七、さびしさにたへたる人のまたもあれないほりならべむ冬の

山里

題しらず

八、とふ人も思ひたえたる山里のさびしさなくば住みうからま

し

月歌あまたよみけるに

九、もろともにかけをならぶる人もあれや月のもりくるささの

いほりに

題しらず

十、山里にうき世いとはむ友もがなくやしく過ぎし昔かたらむ

題しらず

十一、あはれた草のいほりのさびしきは風より外にとふ人ぞな

き

題しらず

十二、谷のまにひとりぞ松はたてりける我のみ友はなきかと思へ

ば

同行にて待りける上人……

十三、もろともにながめく／＼て秋の月ひとりにならむことぞ悲し

き

題しらず

十四、ふるはたのそばのたつきにゐるはとの友よぶこゑのすごき

夕暮

東の方に修業し侍りけるに富士の山を見て

十五、風になびく富士の煙の空に消えて行く方も知らぬわが思ひ

かな

資料六、西行について

西行程自己を語り続けた人はない。だが彼は自分自身について何も書いていない。

彼を知る上には、彼の歌の詞書とか、同時代の人々が彼について書いたものを参考にしてみとめねばならない。次にその関係文献をあげると、

台記 百練抄 吾妻鏡 長秋詠藻 拾遺愚草 拾玉集 その他  
これらによって、彼の生涯を図式すると

(一一一八年)  
元永元年十月十五日生

(一一四〇年)  
保延六年出家(23才)

(一一九〇年)(73才)  
建久元年二月十六日死

尊卑分脈で系図を調べると

秀郷

(七代)

康清

清経女

義清(西行)

仲清(弟とするのは結城系図)

佐藤兵衛尉義清は系図を見ると右大臣魚名の流れを汲み、秀郷(依藤太……有名な武將)から数えて十世の孫に当る。激しい武者の血が流れているといえる。

幼少から兵法、射御にすぐれ、彼は後に頼朝に招かれて、兵法の話をしている。

徳大寺家の隨身として、北面の武士として、華やかな生活が続けていたが、殊に徳大寺実能との関係から、鳥羽・崇徳両院の恩顧を受け、多くの歌友を持つことができた。

和歌についても俗時から恵まれた環境にあった。

宗教については台記に「自<sub>二</sub>俗<sub>一</sub>時<sub>一</sub>入<sub>二</sub>心<sub>一</sub>於<sub>二</sub>仏道<sub>一</sub>」とあり、信仰心が強く、人生を真剣に考えていたと思われる。

保延六年十月、義清は出家した。人々の驚きをよそに、暫くは京都の近郊で修業し、三十歳を過ぎて高野山に入り、六十三歳で高野山を下るまでの五十年間、彼は真言の僧として仏道に励んだ。

彼は初め天台教学から出発して、法華経を持し、浄土教に動かされて、東密に至った。大峰、熊野での修業も数回にわたり、僧としての性格も如実に表わされている。

当時の高野は開祖空海から四〇〇年を経て墮落していたが、中

興の祖覺錢が出てからは練成道場としての価値を持つようになり、出家者（主に没落貴族）達が多く集るようになった。高野での五十年間は仏道の上でも、歌道の上でも有意義なものであったが、晩年に伊勢へ身を退くのは、彼の求めるものがあまりにも深くて、高野がこれに答えることが出来なかったと考えられる。

願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎのもち月の頃  
建久元年二月十六日、西行は往生したのである。

#### 西行の歌について

一、西行上人談抄……蓮阿の聞書

和歌はうるはしく可<sub>レ</sub>詠なり。古今集の風体を本として詠むべし。中にも雑の部を常に可<sub>レ</sub>見。

#### 二、吾妻鏡

詠歌者、对<sub>ニ</sub>花月ニ動感之折節、僅作<sub>ニ</sub>三十一文字ノ許也。

#### 三、明恵上人伝記

西行法師、常ニ来テ物語シテ云ク、我歌ヲ詠ハ尋常ニ異ナリ。華、郭公、月、雪、都テ万物ノ興ニ向テモ、凡所有相、皆是虚妄ナル事、眼ニ遮リ耳ニ滿リ。又読出ス所ノ言句ハ皆是真言ニ非ズヤ。——中略——随<sub>ニ</sub>縁ニ随<sub>ニ</sub>興ニ詠ミ置ク処ナリ。——中略——此ノ歌、即是如来ノ真ノ形体也。

#### 四、後鳥羽院御口伝

西行はおもしろくても、殊にふかくあはれなる、ありがたく、出来しがたかかたともに相兼てみゆ。生得の歌人とおぼゆ。これによりて、おぼろげの人のまねびなどすべき歌にあらず。不可説の上手なり。

#### 五、順徳院「八雲御抄」

中頃よりこのかたは、此みちにたへたる人もすくなし、ただ経信、近くは西行があとをまなぶべし。其様は別の事にあらず、ただ詞をかざらずして、ふつ／＼といひたるがきよきなり。

#### 六、兼載雑談

慈鎮、西行などは歌よみ、その外の人には歌つくり、

#### 七、芭蕉の「西行上人讃」

捨ててはて身は無きものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ 花の降る日は浮かれこそすれ

#### 資料七 新古今集の時代背景

あらゆる文学や芸術は時代の影響を受け、時代を反映していると言える。新古今歌人の多くが生きた時代、それは平安末期から鎌倉にかけての動乱の時代であった。

道長によって代表される平安貴族が政治の中心から去り、実権を失ったのは白河院が院政を開始（一〇八六）してからである。

院政時代は一般に貴族の没落と武士の抬頭という過渡期の時代として捉えられる。一〇九五年に院は北面の武士を設置して武士抬頭の足がかりをつくった。

保元、平治、源平と続く争乱は、大火、飢饉、疫病などと合せ、人々を不安のどん底に陥し入れた。人々の不安は宗教を求め、方向に傾いていったが、天台宗も真言宗も開宗から二百年を経て、弱体化した貴族に迎合し、民衆の不安に応えることが出来なかった。ただ空也の浄土教だけは人々の心を捉えていた。

荘園勢力の増大と、こうした寺院の世俗化は国家秩序を乱すもととなり、むしろ人々を不安に駆りたてたのである。

東国で勢力を伸ばしつつあった源氏は内紛により一時力を弱めたが、一方伊勢の平氏は、次第に力を貯えて、清盛に至って全盛を極めた。一一六七年太政大臣となった彼は奢りを欲しのままに、貴族化への道を辿っていった。この間源氏は、反平氏勢力の旗頭として登場し、後白河院と結んで活発な動きを始めた。一一八一年の清盛の死は平氏の滅亡を予告していた。頼朝の軍は平氏を壇の浦に追いつめ一一八五年三月二四日、平氏は落日の如く西海の波に没した。そこに人々の見たものは盛者必衰、諸行無常の相であった。彼らは現世のむなしさをもつて感じたのである。一一九二年頼朝は鎌倉に幕府を開き武士政権の基礎を築いたのである。だが鎌倉幕府は決して人々に平安を約束しなかつたのである。

#### 思想について

動乱の時代にあつて、人々の求めたものは宗教であり思想である。新古今集の背景になつてゐる時代思想とは何か。それは一口に言つて無常思想だと言える。

これは強烈な仏教的存在論であつて、人々はこの思想を体験と苦惱とにより、受け入れたのである。

この無常思想は当時の中から生れた末法思想の支配する中で受けとめられた。

末法とは仏説によると仏滅から三千年を経ると仏法は破滅し乱れた世が来るという。人々は仏の予言が適中したとして恐れた。折から念仏僧空也は京都で浄土教を広め始め、人心を捉えた。浄土教は阿弥陀仏の救いによつて死後に極楽往生することを願う宗教である。

それまでの天台宗、真言宗は聖道門と呼ばれ、浄土門と区別され

る。聖道門は釈迦が究極の救済者であるために、厳しい修養や經典の理解が要求され人々の不安に答へることが出来なかつた。それに對して浄土教は無常を説き、厭離穢土、欣求淨土の心をうえつけた。

無常とは「無常」で仏教では「一切の物は生滅転変して常住しない」ことをいう。それは究極に於いて死を意味している。この無常思想は三つの重要な面を持つてゐる。

- ① 恐怖性
- ② 永遠性
- ③ 美

無常の持つ恐怖性は死に於いて最高の意味を持つ。また永遠性は無常との對比に於いて求められ、美は祈りとして表わされる。

愴然として無常に泣き、永遠への思慕に濡れた眼でふり仰いだ時の月の美しさ、それを表現したのが中世文学である。

#### 資料八 新古今集について

新古今集は万葉集、古今集と並んで重視されている。

古今集以降第八番目の勅撰集である。歌数は二千首で二十巻にまとめられている。

建仁元年十一月三日、後鳥羽院の院宣によつて着手され撰者に源通具、藤原有家、定家、家隆、雅經と寂蓮が選ばれたが寂蓮は事半ばで没した。

成立は元久二年三月二六日であるが、その後度々切継（撰歌の訂正出入のこと）が行なわれた。

撰歌の重点は同時代におかれ、古今集以後の勅撰集入集歌は除かれてゐる。作者では西行（九十四首）慈円（九十一首）良経（七十九首）俊成（七十二首）式子内親王（四十九首）定家（四十六首）家隆（四十二首）寂蓮（三十五首）後鳥羽院（三十四首）が

多く新古今を代表している。

新古今の特徴は作者の実感の有無などは問題ではなく、趣向と表現とを練ることによって、実感にまさる詩情を創造するところに特色をみとめる。そのため「作りもの」であるという非難は免れない。唯、表現技巧の巧緻は、その芸術性という意味で高く評価されねばならない。修辞では「本歌取り」「体言止め」「三句切れ」が特徴で餘情美を表わしている。

新古今集をよく見ると二つの類型があることに気付く。

定家的（歌つくり）……伝統美、妖艶美、題詠、技巧

西行的（歌よみ）……生活による実感、自己をうたう、独

詠、平明

一般的に、新古今集は定家的なもので代表されるが、永く後世に影響を及ぼしたのは西行的なものであった。

西行の歌は生活の中での実感を技巧にとらわれずに自然に表現している。中世美が「幽玄」とか「有心」とかで捉えられるが、西行は艶ではなく、静寂、枯淡に特色があり、宗祇から芭蕉に至る中世美の源流を見ることができるといえる。

### 資料九 感想文 V その一八

西行が妻子までも捨てて出家したのは、その当時でも珍しい二十三歳という若さであった。この若い西行をそこまで追いつめた原因は何であろうか。それには少なからず彼の深い自己凝視の姿があったことは事実であろう。出家してからの彼は多くの旅を試みた。それぞれの旅に目的はあったにしても、共通したものは、自然を熱愛し、旅を孤独の場として求めてやまなかった心がかかえる。出家したからとは言え、同じ血の通う人間である以上彼

も亦人を恋い、ものあはれを深く感じ、美や真実を求める心に交りはなかったであろう。それだからこそ、彼は現世から切り離された自分の孤独な身を、時にはたまらなく寂しく感じ、時にはそれに力強く一人耐えていたのである。その心が歌の中で人の心を強く打ち、「西行こそ歌よみ」と言われるように、直情的表現が西行的なものとして今日高く評価されている。（女）

西行の生涯の課題は、「自己の究明」ということであつたと思う。彼は旅や草庵の生活を通して、自己を自然に融合させ、その中で自己を鋭く追求することにより、自分自身あるいは人間というものを理解し、その課題を解決しようとしたのだろう。彼が旅を友としたのは自然を愛し、人間を愛していたからにちがいない。そして旅先で感じた人間の哀愁、孤独感、自然美、人間愛を、実感として歌に表わしたのである。それ故、彼の歌は現実的で、真に読者の心に迫る人のあわれを底に秘めている。素朴で写実的な表現からは無常思想が感じられ、歌風は万葉風にも思われる。さらに彼は旅を続ける中で、心と身の不調和になやみ、強い信仰心によつてもそれを克服できず死ぬまで苦しんだようだ。彼の性質は温厚なようだが、二十三歳で出家という事の裏には、武士ゆずりの気性の激しさが感じられる。最後に彼の一生は、人生を真剣に考えた草庵の生活に代表されると思う。（男）

西行の歌を読んで、まず自然と人間との間に何か微妙な結びつきが感じられる。

西行は自然の中で、人間とはどういふものか、どう生きなければならぬかを追求しながら旅を続けた。そうすることによつて、

西行の心に、自然への深い愛着がわいてきている。「道のべに……」の一首には、若くして妻子を置いて出家した強い意志とは反対に、母なる自然に抱かれて、慰めと安らぎを与えられ、自然に対して強い愛着を感じている。勿論、旅をする者のあわれさというものも感じられ、全体から何かさわやかですっきりした感じを受ける。西行のように一人旅に出て、人一倍孤独を感じた人であるのに、その持つ暗さがない点にも感心させられた。(女)

西行は出家の身でありながら、現世の思いを断ち切れず、その中で悩んでこんなに意味深い歌ができた。三十一文字という短い言葉の中に、人生の何たるかを歌いこんだのも歌よみとしての面目がある。旅をしたり、一人山里に住んだりして、孤独と戦い、自己を凝視して、その存在を考えようとした。それも他から押しつけられたのではなく、自分から求めて、そのような寂しさや孤独とたたかったところに、西行の肉人的な偉さがある。こうした中から生れた歌には、さびしさや暗さがあるものだが、西行の歌にはそれが無い。西行の歌を学んで、彼の心がどれだけ分ったかといえば疑問です。只、人生に対する厳しい態度が感じとれたのは確です。(女)

西行は僧であった。そして一生その出家生活の中に自己を探求し続けたが、その生活の中で生れた歌は、人生に対しての寂寥、無常感がよく出ている。彼は宗教的悟達を求めたが、それを求めながらもまだ達することのできない、あせり、悲しさが彼をして歌わずにはいられないギリギリのところまで押しやったように思う。そこが、複雑な現代社会のメカニズムの中にとじこめられ、疎外されてしまった現代人としての悲しさやさびしさ、そしてど

こかしら満されないものを感じる我々と、彼のそれとが相通じるのではないかと思われる。彼の歌からにじみ出ている「もののはれ」は彼でなければ感じられないものであろう。(女)

武門に生まれ育った西行の環境というのは、動乱の時代を背景として、骨肉相争うものであったろう。戦乱、天災、疫病等人間存在を根底からゆすぶるような時代であった。それは不安の時代と呼ばれる現代と相通じるものがある。このような背景の中で、西行は自己を見つめ、自己を問い続けた。西行にとって、自己を知ることが、宇宙を知ることであり、絶対者との邂逅であり、救いに到る道であったようだ。西行にとっての孤独はこのために必要不可欠なものである。生活を純化し、心を清めるために、草庵での、また旅での孤独がどれ程役立ったか知れない。永遠と美と真実を求めるためには、哀愁や寂寥には甘んじなければならぬ。西行のこの厳しさと苦悩は、現代人に無言の示唆を与えてくれるようだ。(女)

#### 感想文 V その二八

西行は、寂しさ、孤独を愛した。人間は家族や友人が側にいても結局は一人ぼっちだと思います。一人ぼっちの楽しさもあると思います。孤独であるということは人間本来の姿だと思います。例え一人であっても、周りにはいつも自然があります。

西行には、月や花の歌が多い。孤独な人は自然により慰められ、自然を愛します。西行もそうであったのだと思います。そして、人が真に求めるものは、人間の世界ではなしに、自然の中にこそあったのだと思います。西行が出家して、山里に庵を結び、旅に

出たのも、自然の中に彼の求めるものを見い出そうとしたからでしょう。西行の歌がすばらしいと言われるのは、自然との触れ合いの中で、自らの心をうたわずにはいられなかったのでしょう。

(女)

もっと西行の歌、人柄などについて知りたい気持である。確かに西行の歌には生活の中での実感を技巧にとらわれずに自然に表現している。その中にたえず動乱して安定しない生活を、また恐怖感をも出していると思う。源氏と平家の争乱、現世の空しさを身をもって感じることのできるこの時代に生きた西行の行動はどうであったか、武士の血が流れている若者が、時代の激流から逃れて、どうして出家したのか、出家の意味は何か。私には西行の態度が第三者的なものと思えてならない。たしかに同輩の清盛は現世の利欲に走り、滅びた。彼もまた動乱の時代を身をもって生きた一人ではなかったか。「生きる」ということはいったいどういうことなのだろう。

(男)

私は西行に少しは羨望の感を抱かずにはいられない。なぜなら、彼は、一生といてよいぐらい長い間自然と対話できたとし、旅を続けられた。もちろん、俗世間への未練、それに孤独感が彼につきまともったことだろう。でも草庵生活を続けられ、それに諸国を旅して、心から自然と融合できた西行に、私は一種のジェラシーさえ覚える。私の心の中にも、できるなら人の世とは離れた山の中で、小鳥と共に目をさまし、日の暮れると共に一日を終えて、春には花が咲き、秋には赤い実のなるそんな自然の中に暮してみたい。早朝一人で散歩する時、満足感を覚え、生への喜びが私の心を満してくる。そうした時私は、「道のべに

……」の歌に出会ったものですから深く感動しました。西行の歌は私の心のふるさとでもあります。

(女)

保元、平治、源平と続く争乱の世の中を、宗教心と俗念の葛藤に悩み、自然との融合を目ざした西行、私達の目には崇高な存在であると同時に、この上なく人間的な人として映る。時代こそ違え、今日の世界情勢は、私達に不安と恐怖をもたらす。それ故、我々にとって西行の歌は暗夜の一灯である。一段高いところから現実を見、自然を愛し、自然との冥合をめざし、人間本来のあるべき姿を賢識している。私達が人間である以上人間性を保つことは最も大切なことだと思います。しかし生意気なようですが、私は彼の歌の中に、ある種の現実逃避を感じるのです。歌に流れる無常感が現実を憂えながらも冷視しているように思え、自然との融合を強く打ち出している程に、民衆との交わりを強く感じることもできないからです。こうした時代に民衆の教化こそ「生きる」ということではないでしょうか。

(女)

西行の歌は静かだ。少しも華美なところがない。しかし彼の作品の底には人間性というものがあふれ出ている。それはただ彼が宗教上にも、文芸上でも高尚な人物だというのはなしに、我々と同じ様に苦悩を抱き、常に何かと戦い続けている一人の我々の仲間として捉えることができる。だがこうした見方からすれば、不満も出て来る。

「西行は俗世間から離れて宗教的悟りを求めて草庵生活を送った」と言うが、これは余りにも出家ということを気楽に考えているのではなからうか。西行から学ぶべきものが草庵生活にあるとするなら、現在我々がこれを実現できる可能性は一体どれ位ある

だろうか。複雑で余裕のない生活の中で、そうした時間を持つことは、むしろ現実逃避にならないだろうか。孤独の中の想念は現代人にこそ要求さるべきものであるが、現実には孤独はもっと違った形で、我々の精神を蝕んでいるようだ。 (女)

恵まれた環境にあった西行が、二十三歳の若さで出家した。出家の理由は何か。その説明の中で私の感じたのは、現実からの逃避と言うことであつた。結果的に見ると、それは正しい道であつたかも知れないが、その時点では正しくなかつたと思う。

人間にとって現世こそ生きる場である。大衆と共に現実生活に足を下した救済が必要ではないだろうか。この辺に西行の人間的な弱さがあつたのではないか。

西行の歌全体に漂う「あわれさ」「さびしさ」は、この弱さからくるものと思われる。

彼の眼には、この世の生き生きした生命の息吹きは映らなかつたのかも知れない。 (男)